

四無量心の研究

増永靈鳳

I

釋尊自身の生命を動かせる深き體験に根を下せる佛數の禪定は漸次一定の形式を取つて益々複雜化するに到つた。今より究めんとする四無量心も亦内容的に見る限り禪觀の一形式であると云はねばならない。この種の研究にして最近我が國の學界に發表されたものは金子大榮氏の『佛教學の諸問題』⁽¹⁾中の一文である。併し是は主として大智度論に依つたものであつて其の源本的意義を探らんとする者には尙不充分であると言はねばならない。固よりこの短文を以て全體を盡すことは出來ないが唯より古き資料に基いてその一斑を示したいと思ふ。四無量には尙四梵堂・四梵室・四梵行・四等心等の異名が存する。四無量をリスト ディッジは four infinitudes ト譯しノイマンは die vier Unermesslichkeiten トなしてゐる。

然らば何故に是を無量 (appamaññayo) ト名くるのであるか。大毘婆沙論八十一卷には其の理由として(一)普く有情を緣じて無量の戲論と煩惱とを對治するが故に(二)普く有情を緣じて無量の放逸の煩惱を對治するが故に(三)是諸の賢聖の遊戯する所なるが故に(四)能く無量の有情を緣じて境となし無量の福を生じ無量の果を引くが故にとの四つを擧げ更に百四十一卷には(一)無量の有情を縁となすに由るが故に(二)無量の善法を生ずるが故に(三)無量の勝果を招くが故にとの三

つを示してゐる。俱舍論⁽⁴⁾二十九卷も後者と殆んど同じく(一)無量の有情を所縁とし(二)無量の福を引き(三)無量の果を感することを理由としてゐる。巴利清淨道論は特に無量の有情を所縁とする點を強調する。尙大智度論⁽⁶⁾二十卷にも理由を説いてゐるが今は是を省略する。要するにこの禪觀は無量の衆生を所觀の對象とし又その結果として無量の福徳を將來するものと考へられたのである。次に増一阿含⁽⁷⁾十六卷⁽⁸⁾二十三卷等には是を四等心と稱してゐる。蓋しこは衆生に對して怨親の別なく平等に四種の心を作用せしめんとする行法であるからである。次の四梵堂・四梵室は其の原語 Brahmavihāra が告ぐる如く元來梵天との俱住同伴を目的とする婆羅門に起原を有することを意味する。増一阿含⁽⁹⁾二十一卷(一〇)には「以ニ何等⁽¹⁰⁾故名爲⁽¹¹⁾梵堂」比丘當⁽¹²⁾知有⁽¹³⁾梵大梵⁽¹⁴⁾一名⁽¹⁵⁾千無⁽¹⁶⁾與等者⁽¹⁷⁾無⁽¹⁸⁾過⁽¹⁹⁾上者⁽²⁰⁾統⁽²¹⁾千世界⁽²²⁾是彼之堂故名爲⁽²³⁾梵堂」とある。たり乍ら漢巴典尊經等にも存するやうに佛陀は梵天との俱住同伴等を目的となさず却つて有漏を捨てて無漏を成じ心解脫慧解脱して現法中に自身作證するを目的とせられたのである。而して四梵堂も亦佛陀の根本的立場によつて變意せられざるを得ないのである。けれども梵天信仰を容易に捨て得ざる婆羅門族出身の者を教化する方法としてこの説を探り梵住・梵堂・梵室の名を留むるに至つたのであらう。ここ佛陀自身に於ける教化法の巧みさも存するのであるが後にはこの種の夾雜性が佛教思想を禍することとなるのである。四梵行の名も亦右に關係を持つであらうが併しこは四清淨行の意味と見てよいであらう。然らば四無量と四梵住とは何等かの差別が存するであらうか。婆沙論⁽¹¹⁾八十二卷には差別なしと差別ありとの二説を擧げてゐる。其の差別としては(一)非梵を對治するを名づけて梵住となし戯論(見愛)を對治するを名づけて無量となし(二)非梵行を對治するを梵住戯論行を對治するを無量(三)梵行を修する者の身に得べきものを梵住、戯論を離るる者の身に得べきものを無量(四)不信を對治するを梵住、放逸を對治するを無量(五)梵世に在るものなれば梵住、上地に在

るものなれば無量(六)未至定及び梵世に在るものなれば梵住、上地に在るものなれば無量(七)會所得のものなれば梵住、未會得のものなれば無量(八)內道所得のものなれば梵住又は無量、外道所得のものなれば唯梵住(九)共所得のものなれば梵住、不共所得のものなれば無量と名づくと説いてゐる。如上の諸項固より理由の存する所であるが併し中に就て第五項第八項等はその特質を物語るものである。是によつて佛教と外學とに於ける禪觀の特徵をも規定し得るであらう。尙無量を梵住と名づくる理由として婆沙論は一梵世は初(靜慮)に在りて具さに得べきが故に(一)非梵を對治するが故に(二)非梵行〔婬欲事〕を對治するが故に(四)梵行を修する者の身中に得べきが故に(五)梵とは世尊を謂ひ慈悲喜捨は梵音の所說なるが故に(七)此の四種を修せば梵天に生じて大梵王と爲ることを得るが故に(八)梵福中に於て最勝最高なるを以ての故に等の八項を擧げてゐるが是こも梵住の外學に由來する消息を窺ふことが出来るであらう。

右四無量に關する文獻は經論の隨所に見出し得るが次の如きは其の主なるものであらう。

長阿含五卷典尊經 同八卷散陀那經 中阿含二十一卷說處經 同三十八卷鶲鶴經 雜阿含二十一卷(五六七) 同三二卷(九一五) 增一阿含六卷(五)

D. N. 13 Jevija sutta D, N, 17 Mahā-sudassana sutta D. N. 19. Mahāgovinda sutta D. N. 25 Udumbarike-sihanada-suttanta M. N. 7 Vatthūpana sutta M. N. 99 Subha sutta S. N. XLVI, 55, A. N. IV, 125. A. N. IV, 190
法蘊足論六卷 品類足論七卷 集異門足論十八卷 雜心論七卷 甘露味論下卷 婆沙論八十一卷一八十三卷 同百四十一卷 俱舍論二十九卷 大智度論二十卷 解脫道論八卷
Vibhanga XIII. Visuddhimagga IX

- (1)九〇頁 (2)大正二七卷四二〇頁 (3)大正二七卷七二六頁 (4)大正二九卷一五〇頁 (5)Vol. I P. 321 (6)大正二五卷一〇九頁 (7)大正二卷六二四頁 (8)大正二卷六六七頁 (9)同上卷六五八頁 (10)大正一卷三四頁 D. N. Vol. II. Mahāgovinda S. P. 252 (11)大正二七卷四二五頁 (12)同上

II

巴利大典尊經に「大典尊婆羅門は慈を伴へる心を以て一方に遍満して住したり。是くの如く第二方、是くの如く第三方、是くの如く第四方も亦然り。即ち上、下、横、一切處、一切方に遍く一切世間を慈を伴ひ廣大無邊にして無冤無害なる心を以て遍満して住したり。悲を伴へる心を以て……乃至……喜を伴へる心を以て……乃至……捨を伴へる心を以て一方に遍満して住したり。是の如く第二方、是くの如く第三方、是くの如く第四方も亦然り。即ち、上、下、横、一切處一切方に遍く、一切世間を捨を伴ひ廣大無邊にして無冤無害なる心を以て遍満して住し、弟子等に梵天と俱住同伴するの道を示したり」とあり、中阿含說處經にも「比丘者心與_レ慈俱遍_ニ滿一方成就遊。如_レ是_ニ三四方四維上下普_ニ周一切一心與_レ慈俱無結無怨無恚無諍。極廣甚大無量善修。遍_ニ滿一切世間成就遊。如_レ是悲喜心與_レ捨俱無結無怨無恚無諍。極廣甚大無量善修遍滿一切世間成就遊」と述べられてゐるが如きは四無量の古き文獻である。即ち四無量は慈悲喜捨の四心を十方世界の衆生に遍満せしめんとする行法である。たり乍らそは行持にあらずしてかかる行持を起さしむる根本となる心の修練に重點を置くのである。さればこの行法はその根柢に三昧の存することを忘れてはならぬ。₍₃₎婆沙論八十二卷に「何等を思惟して慈定に入るや。答ふ、有情に樂を與ふことなり。何等を思惟して悲定に入るや。答ふ、有情の苦を拔くことなり。

何等を思惟して喜定に入るや。答ふ、諸の有情を慶ばすことなり。何等を思惟して捨定に入るや。答ふ、有情に於て捨することなり」とあるが如きはその例證である。慈は與樂の義とされてゐるやうに衆生を愛念してその幸福を願ふ心である。⁽⁴⁾解脱道論や巴利清淨道論は次の如き例を引いて理解を易からしめてゐる。即ち「父母に唯一子あり。情の愛念するところ、子を見て慈を起し饑益心を起すが如く、是くの如く一切衆生に於て慈心饑益心あり」とあるが如き是である。法蘊足論には是を「願くは諸の有情皆勝樂を得んことを」の念願となしてゐる。それ故に慈は無瞋善根を自性とする。されば貪瞋は敵である。巴利清淨道論に忿恨の過害と忍辱の功德とを説いて是が實踐をすすめるのはそのためである。法句經にも「忍辱堪忍は最上の行、涅槃は最勝なりと諸佛は宣へり。是れ人を害ふものは出家にあらず、他を惱すものは沙門にあらざるが故なり」とある。慈を行ぜんとする者は我他彼此の差別を撤廈して衆生を自己の内に包攝し是に親しむの心がなければならぬ。併し心整はざる者は初めよりかかる境地に至ることは到底不可能である。茲に於て衆生を親友・處中・怨讐の三段となし更に親を上中下の三品に怨讐を下中上の三品に分類してその上親より初めて行くのである。而して上怨を上親に均しく觀するやうに心を修練する。⁽¹⁰⁾順正理論等によれば處中をも上中下に分類してゐる。上の處中とは昔より曾て見聞せざりし有情、中の處中とは見聞すと雖も交友せざるもの、下の處中とは交友すと雖も恩怨を離るるものをいふ。併し一般にはかかる分類を取らず處中一品とする。かくして心整ふに至らば漸く想を運らして一邑、一國、一方、一切世界の順に樂を興へ是を饑益せんとする行相を遍滿せしめるのである。毘盧伽にも上、下、横、一切處、一切方の字義を説明してゐるが固より判然たる分類支に依つてゐない。更に清淨道論等にはこの行法の功德として十一を數へてゐる。即ち「(一)安眠し(二)安覺し(三)惡夢を見ず(四)人の爲に愛念せらる(五)非人の爲に愛念せらる(六)諸天守護す(七)火・

毒・刀杖其の身に加はらず(八)心をして速かに定を得せしむ(九)面色悅澤す(一〇)命終に亂れず(一一)未だ勝法「最勝の阿羅漢果」を得ざるも梵世に生る」が如き是である。こは增支部の慈經等にも存する所であるが併し佛教の眞精神より見て必らずしも同意し難きものも存する。

次に悲は拔苦の義とされてゐる如く衆生を憐愍してその苦惱衰損を除去せんとする心をいふ。解脱道論等は「父母に唯一子あり。心の愛念する所、子の苦を得るを見て心に悲惱を起し『苦しい哉』といふが如く、是くの如く一切衆生に於て慈憐愍を起す」と述べてゐる。法蘊足論には是を「願くは諸の有情の皆苦を離るるを得んことを」の念願となしてゐる。されば悲も無瞋善根を自性とする。併し俱舍論二十九卷に「理實には是不害なり」とある如く、慈と區別する。諸瞋を除くにしても婆沙論八十一卷は次の如き差異を示してゐる。即ち「慈は斷命の瞋を對治し悲は捶打の瞋を對治す。又慈は瞋るべきところにて瞋るを對治し悲は瞋るべからざるところにて瞋るを對治す」とあるは是である。

思ふに慈と悲とは表裏の關係をなすものである。慈は樂を與へんとする積極的な感情であるが悲は苦を除かんとする消極的なそれである。されば慈によつて悲は深められ悲によつて慈は高められるのである。苦惱に沈める人は同悲同情の人を得て初めて救はれると言はねばならない。慈が他を自己の中に包攝する如く悲は己を他人の中に没入する心である。
併しこの悲は佛の大悲と混同してはならない。蓋し大悲は佛の十八不共法の一であつて右の悲と異なる點に就き婆沙論三十一卷俱舍論二十七卷は八ヶ條を數へてゐるによつても明かである。尙この悲も初めから自他の差別を除いて平等に觀ずることは困難なるが故に慈に於けるが如く親・中・怨の三段に分類して行する。解脱道論等には前と同様是にも十一功德の存することを述べてゐるが以下は是を省略する。

次に愛念の慈と憐愍の悲とより更に一步を進めたものに第三の喜が存する。喜は慶慰の義とされてゐるやうに衆生が苦を離れ樂を得たるを縁じて快く感じ喜ぶ心をいふのである。「猶ほ父母唯一子あり、心に愛念する所、子樂を得るを見て心に歡喜を生じ『善き哉』といふが如く、是くの如く一切衆生に於て心に歡喜を生ず」とある解脱道論の例證はこの喜の心⁽¹⁷⁾ばえを説示したものである。「法蘊足論は有情の益を得るを深く欣慰すべし」といつてゐる。それ故に喜は喜根を自性とし不樂を對治せんとする。世友は「得・捨を慶慰するは喜の相なりと定義してゐる。従つてこの隨喜の心は同悲の心に増して更に困難である。逆境にある人への同情はさほど難くはないが人の成功繁榮を喜ぶことは蓋し容易ではない。そこには必ず羨望の念が伴ふからである。純粹の意味に於ける隨喜の心は無我の人によつてのみ起される。殊に怨讐者に對する隨喜は無我愛を基礎としなければならない。無我愛を説きながら我執にとらはれるは人情の常である。この人情を克服したところに現はれる欣喜の念が重要である。されば是も親の易きより怨の難きに及ばねばならない。この怨親平等に到るまでには久しき修練を必要とする。以上の論述によつて明かなる如く喜は慈悲と内面的に重要な關係を有することが看取せられるであらう。蓋し隨喜の念を伴はざる慈・悲は眞實の慈・悲とならず、慈・悲を從へざる隨喜の念は決して眞實の隨喜とはならないからである。

最後の捨は平等の義とされてゐる如く、衆生を念じて不憎不愛の平靜平等なる精神をいふ。猶ほ父母は一子に於て念すべきにあらず。念すべからざるにあらず。捨を成じ彼に於て中心を成するが如く、是くの如く一切衆生に於て捨にして中⁽¹⁷⁾心を護るのである。されば捨を護とも稱する。法蘊足論も「應に有情に於て平等の捨に住すべし」と述べてゐる。従つて捨は無貪善根を自性とする。併し理實には無貪と無瞋とを自性とするのである。貪瞋のあるところに怨親好惡の念の生ず

ることは蓋し當然である。かかる差別は所著あるが爲である。無所著は一切を捨てることではない。却つて一切を眞の姿に生かすことである。瞋愛を殺除し無明を起さざることはそれ自身心解脱慧解説の達得となるのである。かの慈悲喜は捨に到つて初めて成就するとはねばならない。即ち四等心の意義も茲に於て完成するのである。而してこの捨も漸修によつて初めて全きを得るのである。併し前の三とは聊かその趣きを異にする。即ち處中（中品）を對象とする。蓋し親を緣ぜば愛を起し怨を緣ぜば瞋を發すが故に中品最も捨し易いからである。而して中品より下怨・中怨・上怨・下親・中親・上親の順に捨して行くのである。先に怨を捨し後に親を捨するは瞋心は捨し難いからである。漸次修習して成滿するに到れば普く欲界の一切の有情に於て捨置の意樂は平等に相續し、異の分別なきことは恰も秤を持するが如く有情類を縁ずること總じて林を觀するが如くなるのである。而して諸の有情を縁ずるは方域の邊際を以て觀ずとすべきか有情の邊際を以て觀ずとすべきかに就て異説が存するけれども文獻では必らずしも一定しなじ。解脱道論は「已に衆生を總攝し已に村田を總攝し已に諸方を總攝す」と述べてゐる。

- ①D. N. Vol. II. P. 250 ②大正一卷五六三頁 ③大正一七卷四二二頁 ④大正三二一卷四五五頁 Vis. Vol. I. P. 321 ⑤七卷大正二六卷四八五頁 ⑥婆沙百四十一卷大正二七卷七二六頁 ⑦Vis. vol. I. P. 295 ⑧Dhammapada. 184 ⑨俱舍論二十九卷大正二九卷一五一頁 ⑩七十九卷大正二九卷七七〇頁 ⑪Vibhaṅga P. 274 ⑫A. N. vol. IV P. 150. vol. V. P. 342 ⑬大正二七卷四二〇頁 ⑭雜阿毘曇心論七卷大正二八卷九二五頁 ⑮大正二七卷一六〇頁 ⑯大正二九卷一四一頁 ⑰增一阿含二十三卷大正二卷六六七頁 ⑱俱舍論二十九卷修捨最初從處中起

III

靜慮の無間に無量を説く理由に就き婆沙論八十一卷は(一)靜慮は四無量を引起するが故に(二)靜慮と無量とは更ひに相引くが故に(三)四無量は是れ靜慮中の勝功德なるを以ての故にの三を擧げてゐる。思ふに四無量は夏四月閑靜處に於て修すると言はれてゐるやうに、それ自身一種の禪觀である。されば毘曇伽等には四無量の前三を四靜慮の前三に最後を第四靜慮に相應せしめてゐるのである。解說道論も「問ふ、慈悲喜に於て何が故に三禪起り第四禪にあらざるか。答ふ、衆生憂惱の起る所瞋恚害不樂なり。彼の憂惱を對治するを以て喜と俱に生じ、心慈悲喜を修行す。是の故に三禪生じ第四禪にあらず。復次に捨地は是れ第四禪なり」と述べてゐることによつても明かであらう。所謂初禪とは「諸欲を離れ諸不善法を離れて有覺有觀にして離より生ぜる喜と樂とを具する」をいひ二禪とは「覺觀を滅したるが爲に内心安靜となり、心一相となり、無覺無觀にして定より生ぜる喜と樂とを具するをいひ第三禪とは喜を離れ捨となりて住し、正念生智にして身によりて樂を感受し諸聖人が『これ捨にして念ある樂住なり』と示す』心狀態をいふのである。慈悲喜には各右の三禪を生ずる。併し捨は第四禪のみである。第四禪とは「樂を捨て又苦をも捨てて而も前に己に悅と惱とを滅したるが爲に不苦不樂にして捨によりて念の清淨となれる』狀態をいふのである。所謂捨念清淨であるから第四無量に相應することは蓋し必然である。第四禪の捨念は苦・樂・憂・喜・入息・出息・覺・觀の八擾亂事を離るるが故に清淨なりとされてゐるのである。⁽⁴⁾ 無刺經では入息出息を以て刺となしてゐる。この刺を除くことは平靜平等なる極をいつたものであらう。かかる境地を文不動三昧とも稱する。蓋しこの三昧は八災患を離れ是等のものに動ぜられないからである。この狀態を巴利沙門果經は「譬へば人ありて頭より足に到るまで白淨衣を以て被覆して坐せむにその全身何れとして白淨衣を以て治普せられざるはなきが如し。是くの如く比丘は純淨なる心を以てその身を遍滿して坐しその全身何れとして純淨なる心を以て治普せら

れざるはなし」と記し捨心の如何なるものなるかを示してゐる。又四無量に分類を異にして四禪を配當する説が毘崩伽に存する。即ち前三無量に初禪中間定二禪三禪を配當し最後の無量に第四禪を配當する説である。こは無覺唯觀の中間定を挿入したまでである。是をも加へて別々に數へるならば捨無量は第五禪となるであらう。尙解脱道論は四無量に於て四禪生ずとして次の文を引用してゐる。「汝比丘當修。此定有覺有觀。汝當修有覺無觀。汝當修無覺無觀。汝當修與喜俱生。汝當修與樂俱生。汝當修與捨俱生」と。是は巴利清淨道論にも引用せられてゐるが漢譯と必らずしも一致しない。元來この文は巴利增支部八法品中に見出し得るものである。是によれば漢譯の有覺無觀は誤譯と見ざるを得ない。こは明かに中間定であつて無覺有觀でなければならぬからである。又漢譯の與樂俱生は原文による限り喜を離れることがあらねばならない。是とは稍趣を異にして解脱道論には「於清淨處慈爲第一。於虛空處悲爲第一。於識處喜爲第一。於無所有處捨爲第一」⁽⁹⁾とある。⁽¹⁰⁾これは雜阿含一十七卷巴利相應部覺相應五四にも見出し得るところである。但し雜阿含一十七卷七四三經の四念處⁽¹¹⁾とあるは四無量の誤りであり右引用文に相當するものの句讀等も杜撰であるといはねばならない。この文は又婆沙論八十三卷にも引用せらるるところである。而して悲喜捨の三無量を修して下三無色に生することは不都合ではないかといふ問を設け是に對し(一)深祕にして解釋不可能(二)無色又は無色の覺志等を無量の聲を以て表現したもの(三)無量と第三禪並びに下三無色とに相似せる點あり(四)無色は眞解脫にあらざることを示すために無量を説く等の四をあげてゐる。大智度論二十卷には次の如く解釋してゐる。慈心もて衆をして樂を得せしめんと願ふならば此の果報にても自らも樂を受けるであらう。三界中で遍淨天(清淨處)は最も樂であるから慈は清淨處に於て第一なりとするのである。悲は衆生の苦を拔かんことを念ずる心である。而して色身あれば必ず苦が存する。色身なければ苦自ら解消する。虛空處は色界の過患を超へ

た處に存する。されば悲を虛空處に於て第一なりとするのである。喜は衆生に心識の樂を與へんことを欲する心である。色身の過患を離れた心識あれば一切法中に於て識自在無邊なることを得る。されば識處に於て喜は第一なりとするのである。捨は衆生の中の苦樂を捨する心である。苦樂を捨するといふは無所有になることである。されば無所有處に於て捨は第一なりとするのである。併し右の説は餘りに技巧的であつて却つて四無量自身の宗教的意義を逸しはしないかと思はれる。蓋し釋尊に於ける定の根本精神を離れては全く戯論に墮するの嫌ひが存するからである。然らば定の根本義とは果して何であるか。毘曇伽の註「義透逸」⁽¹³⁾に「この心一境たらしむ三昧なるものは動亂なく掉擧なきを特相となす。而して同生の諸法（心心所）を一所に結合するを作用とすること恰も水の洗粉に對する如く心を靜め智慧を生ぜしむるをその表れとなす。蓋し心靜まりて如實に知見するが故に。而して特に樂を足場とするものにして要するに風なき時燈火の確立するが如く、心の確立するは三昧なりと知らざるべからず」とあり巴利清淨道論に「定とは如何なる義なりや。定とは善く定置するの義なり。此の善く定置すといふは何ぞや。心心所を一境に平等に定置し安住せしむるをいふ。それ故にその法を行するによりて一境に心心所が平等によく動亂なく散亂なくして豎立す。是當によく定置するの義なりと知るべし」とある。

要するに定とは心一境性と言はるる如く惡不善の法を離れて心を一對象に專注するの意であつてあらゆる禪的修行に伴ひ是を可能にする精神集注の統一的な道又はかくして豎立せられたる不動安住の狀態をいふのである。⁽¹⁵⁾ この三昧の境地は佛教の依つて立つべき佛陀の自證體驗を基礎とするものでなければならぬ。慈悲喜捨の四無量もかかる三昧の深義に觸れて初めて意味を持つに到るからである。茲に四無量の宗教的意義が我々の生活自體の中に生かされてくるのである。

尙四無量は元來梵天と俱住同伴する道とされてゐるが併し他には慈によつて梵身天に悲によつて光音天に喜によつて徧淨天に捨によつて廣果天に生れるとの文獻も存する。けれども梵身天以外に生ることは四梵住本來の目的に相應せざるものであつて多分後に到つて四禪の依處とするところよりかく言はるやうになつたのであらう。蓋し巴利增支部四・一二三・一や中阿含四十三卷意行品・雜阿含三十一卷八六四等には初禪を修して梵身天に第二禪を修して光音天に第三禪を修して徧淨天に第四禪を修して廣果天に生るといふ文獻も見出しえるからである。併し乍ら佛教本來の意味よりすれば梵天等の存在を問題とせず又其の他の天に出生するが如きことも目的とせざるものである。四禪を修することと天に生ることを分離しなければならないやうに四無量は生天の問題とは關係せしめざるが正當である。無限なる純粹感情を十方の衆生に對して顯現する心ばえを修することと自身で既に宗教的意義が十分に認められるであらう。

而もこが眞にその意義を發揮せんとするには禪定を根據としなければならない。否四無量自身が慈の定乃至捨の定と稱せらるる如く一種の禪定である。只四禪等と異なる所はその個人的なるに對しこは欲界の衆生を所縁とするやうに社會化せんとする傾向の見出さることである。固より與樂・拔苦・隨喜・捨置等の社會的行持ではないがかかる行持の根本となる心の修練に重點を置くのである。思ふに教團の使命は自己の修練と社會教化とに存する。四無量は社會教化のための自己修練である。この修練は他日社會教化の實果を擧ぐる基礎となるものである。

次にこの四無量は慈悲喜捨の順によつて修すべきかといふに一般にはこの順次入を取るのである。併し必らずしも是のみでないことは婆沙論八十二卷に順次入・逆次入・順超入・逆超入の四種を擧げかの八解脫・八勝處・十遍處等のそれと峻別してゐるによつても明かである。けれども四無量の原意よりすればこの順次入の方が正當であらうと思ふ。蓋しその構成

の内面的關係を省察すればこの順序が修練的心理的過程を辿つてゐることを首肯し得るからである。

尙故木村博士は「必ずしも慈悲喜捨の全體に涉るを要しなじ。その一に徹底すれば充分である」と言はれてゐるがその心理的關係から考察するにこの順を追ひて全體に涉つた方が正當のではなかつたかと思ふ。蓋しげの四無量は易より難に進み且相互に内面的關係を有するからである。

- ①Vibhaṅga P. 277. ②S. N. vol. V. Saccavibhaṅga sutta P. 252 ③婆沙論八十卷大正二七卷四一七頁 ④中阿含二十一卷大正一卷五六一頁 ⑤中阿含五十卷加樓烏陀夷經大正一卷七八頁 M. N. vol. I 66 Lat. ukikopanamasutta P. 455. 舍利弗阿毘曇論十四卷
⑥大正三十一卷四三八頁 ⑦Vis. vol. I P. 322. ⑧A. N. vol. IV. P. 300 ⑨大正三十一卷四三八頁 ⑩大正二卷一九七頁 ⑪S. N. vol. V. PP. 119-121 ⑫大正二十一卷五三一頁 ⑬Atthasālinī PP. 118-9 ⑭vol. I PP. 84-85 ⑮衛藤教授「禪の思想」(東洋思想)七頁參照 ⑯A. N. vol. II PP. 128-130 ⑰A. N. vol. II. PP. 126-128 ⑱原始佛教思想論三八八頁